

方剤学講座4回（諭担当）

東邦大学 田中耕一郎先生依頼

2026年度

中医方剤（処方）は歴史上10万方以上が記録されています。しかし、それらすべてを覚えることは現実的ではありません。では、古代の医家たちはどのようにして処方を考え、使い分けてきたのでしょうか。本講義では、単なる処方を暗記するのではなく、処方が生まれた背景にある自然環境、歴史、医学思想に注目しながら方剤学を学びます。生薬の組み合わせではなく、自然環境や歴史的背景と深く関わりながら形成されてきました。本講義では、方剤を単なる生薬の集まりとしてではなく、「自然・身体・医学理論」が結びついて形成された知的体系として理解することを目指します。古典処方の背景にある発想を知ることによって、方剤の見方が大きく変わるはずで、東洋医学の奥深い世界を、歴史・自然・現代医学の視点から一緒に探っていきましょう。

第1回：解表剤

麻黄湯 桂枝湯 葛根湯 麻黄附子細辛湯（香蘇散）

寒冷で風の強い北方地域に生育する麻黄、温暖な地域に分布する桂枝、夏の高温と豊富な日照の下で旺盛に繁茂する葛など、それぞれの生薬は生育環境に応じた特性を有しています。こうした自然環境の特性を踏まえ、東洋医学では麻黄湯、桂枝湯、葛根湯といった代表的な解表剤が考案されました。本講義では、生薬の生育環境や薬性、歴史的背景を手がかりに、方意（処方の意図）と生薬配伍の考え方を概説し、解表剤を体系的に理解するための基礎を学びます。

第2回：理気剤Ⅰ

香蘇散（半夏厚朴湯） 平胃散 九味檳榔湯（四逆散）

第3回：理気剤Ⅱ

四逆散 加味逍遙散 柴胡剤（小柴胡湯類） 越鞠丸 五積散

気血水は東洋医学を理解するうえで重要な基本概念ですが、理解が難しいと感じられることも少なくありません。第2回および第3回の講義では、「気」の異常に注目し、気滞・気逆・気鬱といった代表的な病理状態を取り上げます。これらを現代医学の視点から捉え直し、自律神経系の調節、エネルギー代謝、胃腸機能の異常などとの関連を解釈します。また、東洋医学の理論と現代医学的理解を結び付けながら、理気剤に用いられる生薬や方剤の組み合わせ、臨床応用や使い分けについて解釈し、理気剤の基礎を学びます。

第4回：化痰剤・利水剤・健脾化湿剤：小青龍湯 二陳湯（二陳湯加減方） 小半夏加茯苓湯 茯苓飲 五苓散 啓脾湯

近年、エピジェネティクスやエクソソームに関する研究と治療が注目を集めており、体内の微細な環境変化が健康や疾患に深く関わる事が明らかになりつつあります。東洋医学では、古くから体内の内部環境の乱れを「瘀血」「痰湿」「痰飲」「水毒」などの概念で捉えてきました。駆瘀血剤や化痰利水剤、健脾化湿剤は、単に血流や水分代謝を改善するだけでなく、体内環境や腸内菌叢のバランスを整え、代謝や全身機能の調和を回復させる働きがあると考えられています。本講義では、「痰」「飲」「湿」「水」の概念を理解したうえで、化痰剤、利水剤、健脾化湿剤の基本的な考え方と代表的方剤について概説します。